

The Road to 2027

仲道郁代

ピアノ・リサイタル

*The*  
Ikuyo  
Nakamichi *Road*  
*to*  
2027

シューベルトの心の花

2024年10月27日 東京文化会館 小ホール

# シューベルトの心の花

私たちは知っている

自分という灯が いつか消えゆくことを

ここに在ること

感じていることの

輝かしさを 愛おしさを

哀しさを知っている

シューベルトは

在ることのその先へ 憧れを見た

透明な憧れを

彼が紡いだ音の一つ一つは

花弁となり

彼の心に 私たちの心に

幾重もの花がひらいていく

仲道郁代



# PROGRAM

## シューベルト 4つの即興曲 D899 作品90

Schubert, Franz: 4 Impromptus D 899 Op. 90

第1番	ハ短調	No. 1 in C Minor
第2番	変ホ長調	No. 2 in E-Flat Major
第3番	変ト長調	No. 3 in G-Flat Major
第4番	変イ長調	No. 4 in A-Flat Major

## シューベルト 4つの即興曲 D935 作品142

Schubert, Franz: 4 Impromptus D 935 Op. 142

第1番	へ短調	No. 1 in F Minor
第2番	変イ長調	No. 2 in A-Flat Major
第3番	変ロ長調	No. 3 in B-Flat Major
第4番	へ短調	No. 4 in F Minor





# シューベルトの心の花

仲道郁代プログラムを語る

## 「存在」——

### シューベルトとベートーヴェンの違い

今回のリサイタルでは、シューベルトの《即興曲》作品90と作品142を取り上げます。今年の春のコンサートで、私は「夢は何処へ」という題のもとに、ベートーヴェンのソナタ3曲とシューベルトの《幻想ソナタ》を演奏しました。このプログラムを通して痛切に感じたのは、ベートーヴェンとシューベルトの大きな違いです。春のコンサートの際に対談した美学者の小田部胤久先生曰く、夢は何処へと探し求める行為は、ベートーヴェンは哲学者カント的な夢・理想へと向かい、目指す行為である一方、シューベルトは夢や理想には到達しないと分かっているながら、そこへの道筋を味わう、すなわちノヴァーリス的な夢へのさすらいであるということでした。この

ことと今回のテーマは、深くつながっています。

《即興曲》作品90と作品142は、ともに1827年の後半に作曲されたと考えられています。《幻想ソナタ》は1826年。亡くなったのが1828年ですので、亡くなる前の1年半、ないし、2年の間の作品たちです。

ちなみにシューベルトは1797年に生まれ1828年11月に亡くなりました。ベートーヴェンは1770年に生まれ1827年3月に亡くなっています。シューベルトのほうがかなり若いのですが、亡くなったのはベートーヴェンの死の翌年。シューベルトは夭逝したために薄幸というイメージがあるかもしれませんが、ベートーヴェンの葬儀、当時のウィーンで2万人もの人が集まったその盛大な葬儀において、ベートーヴェンの棺のいちばん前を担ぐという大役を与えられているわけですから、音楽家としてウィーンで高く認められていた作曲家でもあったのです。



フランツ・シュテーパー画 『ベートーヴェンの葬儀』(1827年)

そのベートーヴェンが亡くなった年の後半にまとめられた《即興曲》たち。ベートーヴェンを崇拝していたシューベルトの意識の中で、ベートーヴェンの死が、作品と無関係だったとは私には到底考えられません。

さて、ベートーヴェンとシューベルトの違いについてです。ベートーヴェンの作品から感じるのは、「存在の意味」ということです。なぜ自分は存在するのか、もし運命があるのならそれに抗い乗り越える自己とは何者なのか、そして乗り越えていく様を讃えることの大切さと、それが自己という個人的話から人類という普遍性へと変換されること。彼はそれらの意識を大勢の人々に伝えるという使命を担っていると考えていたのだと思います。彼にとっての存在の意味するところとは「存在の意義」なのだと、シューベルトに取り組んでみて強く感じています。というのは、シューベルトは存在の意義については追及もしていないと思うのです。存在の意味も問わず、いわば非常に自然なことで捉えていたのではと思います。その存在とは、消滅することの鏡のようなもの、つまり、存在しているということは、存在しないということを理解しているから存在していると思えるのだ、ということ。存在と消滅が鏡のようであるため、自分はたしかに存在しているといえるのか？と考えていくと、存在と非存在の境界線が怪しくなっていくというような感覚を、シューベルトの作品からは感じます。自分はここにいる、人と交わり、自然を愛でる、が、ここにいるとは感じられるがしかし、それとて、孤独である。とすると、幸せというものがあるのか？それがあつたら、この世ではないのであろう…となっていく世界観。シューベルトの名前を世に知らしめた作品、《魔王》では、魔王=死神がいるよ、来るよ、と子どもがいます。そのようなことが作品1から示されていることも、意味深いことだと思います。

今回の「心の花」というタイトル自体にも、存在は消滅することを知っている人の心の中に灯る花たちとは…という意味も含まれています。

## 作品の特質から考える シューベルト像

シューベルトを理解しようとするときに、その観点を整理するのは至難の業で、茫洋としています。茫洋とすることも実は、だからシューベ

ルトなのだということにつながっているように思います。例えばベートーヴェンならば、作品の構造が論理的なので、どのように論理を展開させようとしたのか、コアになっている概念は何かと探っていくと見えてくることがある。ショパンであれば、ポーランドの歴史やポーランドの踊りの旋律、当時のパリの社交界や彼自身の嗜好といったキーワードから見えてくることがある。シューマンは文学というキーワードが与えられるでしょう。ではシューベルトはというと、存在と非存在との境界の曖昧さ、自己という存在を縁取る境界の曖昧さ、曖昧な故の美しさ、といったところが、シューベルトなのではないかと考えています。

そのシューベルトの音楽を紐解いていくとき、歌曲であれば、どのような言葉にどのようなメロディ、リズム、調性を配したのかということが、大きな鍵になることでしょう。ピアノ曲には言葉は添えられていませんが、シューベルトの特性としていくつかのポイントを挙げることはできます。それらのポイントからも、シューベルト像を浮かび上がらせることができるかもしれません。

## ・反復

ソナタでも、今回演奏する《即興曲》でも、同じメロディの反復は非常に多く見られます。歌曲の作曲家であることを考えれば、同じメロディの反復でも、異なる歌詞がついていると考えることもできます。実際そのように音楽の流れを捉えることもできますが、例えばベートーヴェンでは反復においても展開があり、何のために反復し、どこに向かうのか明確なのですが、シューベルトの反復はさすらいともいえるのか、非常に不確かな、不安とともにある反復も多いのです。自分の境界が曖昧で、確固たる自分自身はそこにいない、だから反復しなくてはならないというような、そんな感じがするのです。

## ・時間感覚

昨年の秋、私はブラームスをテーマにコンサートを行いました。ブラームスを通して感じたのは、積み重ねることは失うことと同義なのだということでした。これについて、ブラームスの演奏をお聴きくださった哲学者の方が、人は失うという仕方で時間を経験するのだとおっしゃって、私が感じていたことはこういうことなのだと思



に落ちました。さて、シューベルトはといいますと、私にとってシューベルトの時間軸は「無」なのです。体験しているのは進んでいる時間なのか、過去の時間なのか、はたまた知らない未来の時間なのか？ 時折、その時間の体験すら、流れている時間ではなく、止まった時間であるかのように聴こえます。シューベルトのソナタは、その長大さや反復の多さ、物事が展開していかないということから、眠りの世界へと誘われてしまうといわれることがあります。たしかに止まった時間となると、眠気に襲われる可能性もあるとは思いますが…、そこにシューベルトの美があるのだとしたら。それは全く寝ている場合ではありません。感性のアンテナを研ぎ澄ませて、その超越した感覚を味わおうとすると、聴こえてくる世界のあまりの美しさに、呆然とし、悲しくなるほどです。

### ・調性

調性については、それぞれの曲の中でお話ししたいと思いますが、選ばれる調性、反復に使用される調性にはそれぞれ意味があります。シューベルト自身「調などどうでも良いと思う者は所詮音楽家ではない」といったと伝えられています。

### ・リズム

シューベルトには特有のいくつかのリズムがあります。長-短-短のリズム、ターンタのリズム、3連符のリズム（《魔王》もそうですね）、タタータのリズムなどです。これらがどのように使われているのかを探ることによって、聴こえてくる場合があります。

これらのリズムの形や調性は、古くからの修辞学や、彼独自の書法として意図して用いられているはずですが。シューベルトは「僕の作ったものは、音楽への知性と、僕の痛みによって存在する。痛みだけが作ったものは何であれ、世界を喜ばせることがほとんどできないように思う」といっています。鋭敏な感覚や考えを、極めて知的に音楽という作品に昇華させたのだと思います。演奏する私は、存在することとしないことの境界線上にある世界の美しさに身を置き、そのとてつもなく特別な世界を私自身の特別な音として立ち上らせる努力をするのみ、そのように思います。

## 4つの即興曲 D 899 作品90

**第1番**の調性はハ短調です。ベートーヴェンが《運命交響曲》や《悲愴ソナタ》など、運命的なものを表す際に用いた調性といわれています。そのハ短調は、衝撃的なソの音のフェルマータで始まります【譜例1】。ソのオクターヴだけ。これだけ聴くと、ハ短調だと分かりません。ト長調とともとることができる方法で書かれています。

ト長調は、シューベルトにとって自然界を象徴する調性とも捉えることができます。奇しくも、春のコンサート「夢は何処へ」のプログラムで最後においた《幻想ソナタ》はト長調でした。ソにまわりつく音たちの中に、自然の美しさ、人生の美しさ、儚さを聴くことができました。そして曲の最後は、ト長調の和音の連打でした【譜例2】。

シューベルトの中で《即興曲》作品90が《幻想ソナタ》から続く作品であるという意識があったのかは分かりませんが、《即興曲》作品90の始まりのソの音は、《幻想ソナタ》で見出したかった世界の象徴のようにも捉えることができると思います。しかし、それはハ短調の運命の中に沈んでいってしまうのです。

この衝撃的なソの始まりに続く部分では、明らかにお葬式と関連が見られます【譜例1】。ターンタのリズムは、葬送を表すリズムだからです。粛々と歌われる葬列の歩みの歌がハ短調で奏でられます。またこの部分で思い出されるのは、ムソルグスキー《展覧会の絵》の冒頭です。単旋律の詠唱から始まり、唱和されるというあり方。ロシア正教のミサのあり方を思いました。

ところがハ短調の和音が鳴らされたその直後、変イ長調の和音が鳴ります【譜例3】。変イ長調は、シューベルトにとって特別な調といわれています。「自らの内なる幸福」です。衝撃的なハ短調と変イ長調の和音の交錯のち、シューベルトがよく使用する3連符に乗って、内なる幸福の調で歌われるメロディが現れます。冒頭と全く異なる印象を持つ、いわば第2テーマとも聴こえるこの部分ですが、実はこのメロディのリズムは、最初の葬送のリズムなのです。

このリズムを持つメロディは、さまざまに調性の移り変わりを経て、再びハ短調となります。

シューベルトの調の移り変わり方は、明と暗のように対立するものではなく、まるで当時19世紀前半にウィーンで大変に流行した万華鏡のようです。

そして最後、冒頭のメロディに戻ったときに、ソの音があたかも鐘のように鳴らされます【譜例4】。冒頭での衝撃的なソ。これが鐘だとしたら、なんの鐘なのでしょう。葬儀の鐘か、死を意識させられた己のおののきか。その鐘とともに最

後にはハ長調の光明を見出して終わります。けれども、救われたという感覚は得られません。自分の悲しみと、そうでない世界との境界線がぼやけて終わるかのようです。

【譜例1】  
《即興曲》作品90  
第1番 冒頭

【譜例2】  
《幻想ソナタ》  
第4楽章 最後

【譜例3】  
《即興曲》作品90  
第1番より

【譜例4】  
《即興曲》作品90  
第1番 最後

第2番はお子さんの発表会などでもよく演奏される曲です【譜例5】。一見、コロコロと連なる3連符のスケールと激しい中間部を伴った美しい曲と見えるかもしれませんが、音がコロコロと進んでいるのに、実は進んではいない、止まっているかのような感覚を持つという不思議な曲でもあります。変ホ長調で始まったコロコロと連なるスケールは、同じ主音を持つ短調の変ホ短調へと移ろい、再び変ホ長調へと移り変わります。この移ろいにもシューベルトのさすらい、展開していかない、孤独とともにある世界感を感じます。

そして中間部ではロ短調が奏でられます【譜例6】。ロ短調は、バッハのロ短調ミサや、リストのロ短調ソナタにあるように、特別な調です。神とも悪魔ともいわれる調性です。

ここで《幻想ソナタ》でのロ短調の使い方を思い出したいと思います。第3楽章では、ロ短調がロ長調に変わる、極めて美しい瞬間があります。これが《幻想ソナタ》のクライマックスであると私が捉えている部分なのですが、シューベルトのロ長調の使い方は、最高度の歓喜であるように思われます（ベートーヴェン《皇帝》の第2楽章の天上的なロ長調の扱いとも通じます）。ところがこの第2番では、その最高度の歓喜には至ることはできず、ロ短調のまま、半音ずれて、変ホ短調になってしまうのです【譜例7】。そこから、冒頭の部分に戻るところで、シューベルトは、ディミヌエンドの松葉の記号と、diminuendoという言葉と、decrescendoという言葉と、3つの同じ指示をわざわざ重ねて書いているのです。何と特別な部分でしょうか。

【譜例5】  
《即興曲》作品90  
第2番 冒頭

**3連符で連なるスケール II**

Allegro

変ホ長調

【譜例6】  
《即興曲》作品90  
第2番より

ben marcato

ロ短調

【譜例7】  
《即興曲》作品90  
第2番より

半音下がって

ロ短調から

変ホ短調へ

だんだん弱く

dimin. だんだん弱く  
decresc. だんだん弱く

第3番は変ト長調【譜例8】。フラットが6つもついています。めったに使われない稀な調性です。ここにもシューベルトの調性の万華鏡マジックがあります。前曲のコーダ (Coda) に入る直前の *ff* の和音は、この調の和音なのです【譜例9】。

と考えると、前曲ではコーダの激しさへと移り変わっていった感情が、その和音そのままに第3番の超越した世界へ行ったかのようにあります。

そしてこの曲では、進んでいるように感じられ

【譜例8】  
《即興曲》作品90  
第3番 冒頭

III  
長 - 短 - 短のリズム

Andante

変ト長調

【譜例9】  
《即興曲》作品90  
第2番より

250

変ト長調

Coda

変ホ短調



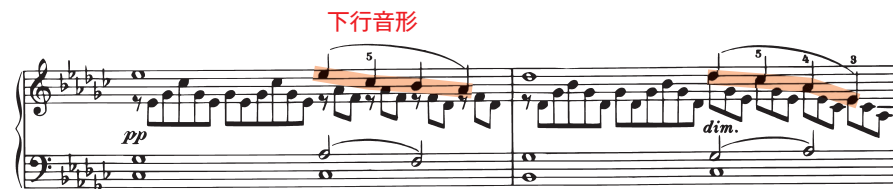
る時間と、過去に戻っているように感じられる時間への慈しみ、愛おしみが、痛みとして伝わってきます。憧れを表すソドレミ音形の反対形のような下行音形がたくさん出てくるのも、意味深いと思います【譜例10】。

第4番は変イ短調で始まります【譜例11】。万華鏡のように和声を移ろいながら16分音符がハラハラと降りてきます。時折ほのかに変イ長調が現れ、ラ<sup>b</sup>レ<sup>b</sup>ミ<sup>b</sup>ファの音形が何かを求めるとかの如く現れます【譜例12】。

中間部のトリオは、ベートーヴェンの《月光》ソナタの第1楽章と同じ嬰ハ短調です【譜例13】。嬰ハ短調は、悔恨の嘆き、満たされぬ愛のため息が、この上なく激しい憧れと渴望となるというものと言われます。ラソ<sup>#</sup>ラソ<sup>#</sup>と、悲痛な叫びとも取ることができるff<sup>z</sup>の音形【譜例14】のあと、再び冒頭部分に戻ります。

そして、最後は変イ長調で終わるのです。第1番でも、変イ長調は大きな意味を持っていましたね。4曲で大きな孤を描いているのだと私は思います。

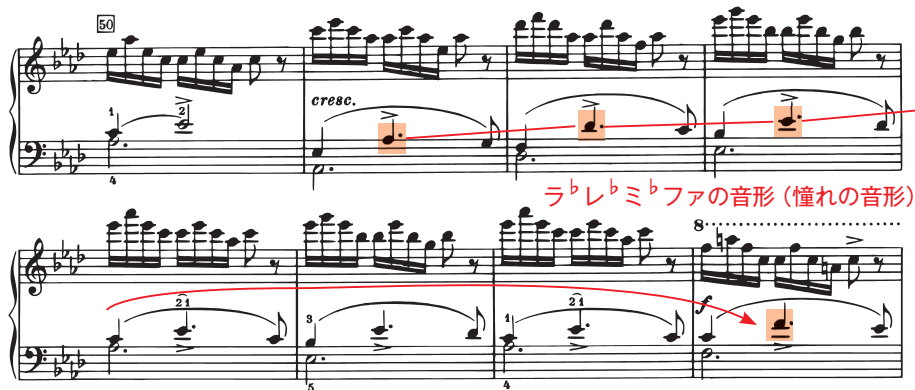
【譜例10】  
《即興曲》作品90  
第3番より



【譜例11】  
《即興曲》作品90  
第4番 冒頭



【譜例12】  
《即興曲》作品90  
第4番より

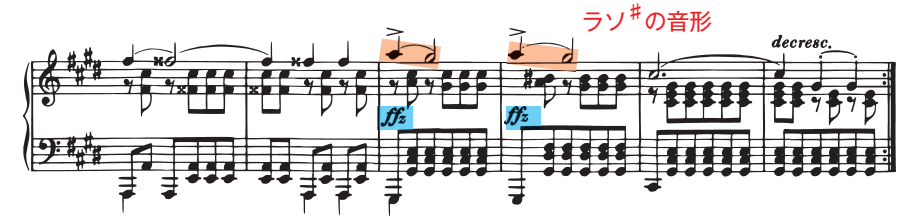


【譜例13】  
《即興曲》作品90  
第4番より



嬰ハ短調

【譜例14】  
《即興曲》作品90  
第4番より



## 4つの即興曲 D 935 作品142

ベートーヴェンの死の年、1827年後半に書かれたとされるこの曲。第1番のヘ短調の不安な様子からは、ベートーヴェンの死だけではなく、自分自身の消滅への想念をも感じられるように思います【譜例15】。

作品142について、シューマンは1838年の『新音楽時報』において、この4曲は4楽章のソナタと捉えることができると発表しました。たしかに、第1番：ヘ短調、第2番：変イ長調、第3番：変ロ長調、第4番：ヘ短調という調性関係からしても、曲想からしても、大きなソナタとも捉えることができます。また、これはまだ直感にすぎま

せんが、シューマンの第3番の大ソナタのアイデアに、シューベルトの作品142があるのではと考えてしまいます。ヘ短調という調性、冒頭の下行音形、第3楽章の変奏曲、最終楽章の楽想などに通じるものがあります。作曲家同士の作品の関係性は非常に興味深いことです。実際、ベートーヴェンの第12番の《葬送ソナタ》とこの作品142の4曲は関連していると私は考えています。作曲年がベートーヴェンが亡くなった年であることや、その後シューベルトがベートーヴェン没後1年のコンサートの準備をしていたこともある種の裏付けにもなるかと思いますが、作品そのものからも“死”を悼む感覚を感じます。

【譜例15】  
《即興曲》作品142  
第1番 冒頭



ヘ短調

第2番の冒頭と《葬送ソナタ》の第1楽章のテーマは、同じ調性、同じ3拍子で、似たようなメロディです【譜例16、17】。冒頭のメロディが歌われたあとの部分は、ベートーヴェンのソナタ第3楽章《葬送》の大砲が鳴るシーンと同じような誇らしさを感じます。第3楽章《葬送》には「ある英雄の死を悼む葬送行進曲」と記されていますが、この第2番にも、そういった畏敬の念が根底にあると感じます。

第3番は「ロザムンデの主題」による変奏曲です【譜例18】。ベートーヴェンの《葬送ソナタ》も第1楽章は変奏曲でした。バリエーションでさまざまな思い出を語っているかのような曲です。

この第3番でも、なつかしい思い出の中にあるような感覚を持ちます。ロザムンデとは、シュー

ベルトの音楽劇《キプロスの女王ロザムンデ》の主人公の女性です。初演当時の脚本が失われているため上演することのできない作品ですが、ロザムンデが育ての親と再会する場面の前に奏でられる間奏曲がこのメロディであったという説があります。育ての親と再会する、そのなつかしさや思い出、そんな感覚がこの曲にはあります。

途中には、アンドラーシュ・シフが第九交響曲の歓喜の歌の引用だと指摘する部分もあります【譜例19】。だとしたら、ベートーヴェンへのオマージュともいえるでしょう。今回演奏する曲の中で唯一、幸せな思い出、生きていた実感を噛みしめることができる曲です。この幸せな思い出の裏に、しかしながら低音ではタタータのリズムがずっと鳴らされています。これは狂気のリズムともいわれているものなのです。

さらに、最後の第5変奏の左手もとても印象的です【譜例20】。右手の3連符の連なりが幸せに漂っているように聴こえながらも、左手は単なる伴奏ではなく、実は狂気のリズムだということは恐ろしいことです。

そして第4番、最後の曲です。変イ長調を垣間見ることはあれど、諦めなのか、調性はさまざまにずれていき、リズムも1拍目からずれていきます【譜例21】。

最後は Piu presto で怒濤の如く、狂おしく駆け降りて、8分音符のファ、このたった1音で、あっけなく終わってしまいます【譜例22】。人生とはこのように途切れるのか、と。実体として存在としての確信が持てないままに、ただただ通り過ぎてしまったというように。

存在とは、何なのでしょう。

私は、シューベルトのこれらの作品を通して、自分の、そしてシューベルトの心の中へと深く降りていく感覚を持ちます。そこには、存在することを果たして捉えられるのかという不安、存在するならば、いつかは消滅するであろうと知ることの不安があります。けれども、シューベルトの音を通して、音を聴くことによって、自分自身の心の中に開く花のような感覚をもまた、持つことができます。それはとても大切な、愛おしい花として、今、たしかに存在しているのだということを感じさせてくれるように思うのです。

【譜例16】  
《即興曲》作品142  
第2番 冒頭



変イ長調

【譜例17】  
ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ  
第12番《葬送》第1楽章 冒頭



変イ長調

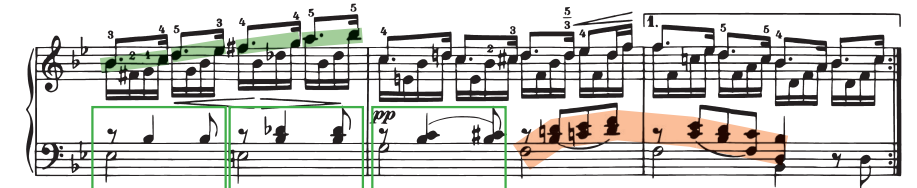
【譜例18】  
《即興曲》作品142  
第3番 冒頭(テーマ)



変口長調

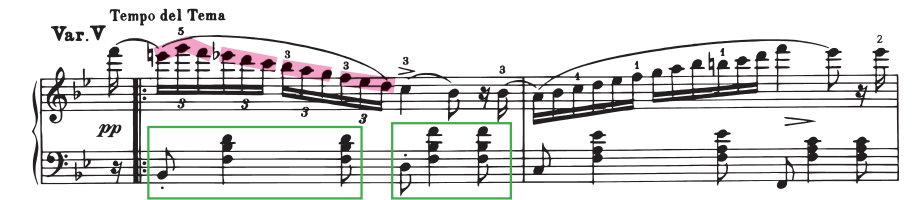


【譜例19】  
《即興曲》作品142  
第3番 第1変奏より

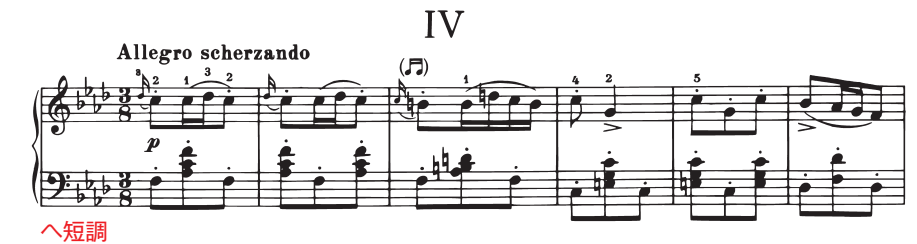


タタータのリズム(狂気のリズム) 歓喜の歌(第九)の引用?

【譜例20】  
《即興曲》作品142  
第3番 第5変奏冒頭



【譜例21】  
《即興曲》作品142  
第4番 冒頭



へ短調

【譜例22】  
《即興曲》作品142  
第4番 最後





対談 仲道郁代×野間俊一（精神病理学者／精神科医）

# シューベルトの心の花

——存在の悲しみ、心に灯る花

シューベルトの8曲の《即興曲》について仲道は「心の花」というテーマを見出した。ここでは精神病理学者／精神科医の野間俊一氏をむかえ、人の心の痛みや人の心が根源的に求めるものについて、語り合った。



## 心の痛みを聴く

仲道：今日は精神病理学がご専門で精神科医の野間俊一先生と一緒に、私たちがシューベルトの音楽からどのようなことを聴くことができるのかというお話を伺いたと思います。シューベルトを精神分析したり病気として見たりするというのではなく、シューベルトの、そして私たち人の心のあり方という観点から、お話をさせていただきますと思っています。

野間：よろしくお願いたします。私は精神科医ですけれども、精神病理学という分野を専門にしています。精神病理学というのは、決して脳から心の病を探ろうとか、あるいは何か心理的な原因を探って、こんな生い立ちだったからこのような病気があるんじゃないかというような見方をするのではなく、悩んでおられる方の体験そのものをお聴きして、その中に何か、その方独自の心のあり方があるのではないかとということを見ていくんですね。そこからさらに、病気の方だけではなく、健康な人々の心のあり方も考えていきます。一般の方にもそのような考え方がお役に立つことがあるのではないかとことを常に考えながらやっている、そんな学問なのです。今日は、そ

のような精神病理学という視点から、お話をさせていただきますしたいと思います。

仲道：私はシューベルトを演奏していると、とても心の痛みということを感じるのです。心の痛みというのは、どの作曲家の中にも、それぞれのあり方で感じられるのですけれども、野間先生は人の心の痛みということ、どのように捉えていますか。

野間：心の傷とか痛みという問題ですが、本当に皆さんそれを抱えて私たちのところに来ていただくわけなのですが、なかなかそれがどのようなものかというのは、一言では言えないというか、まだまだ分からないことは多いです。もちろん明らかにご自身が非常に繊細なものを持っておられて、もう瞬間、瞬間、本当につらいと思いつつ生きておられる方もたくさんいらっしゃいますし、先ほど原因を探らないとは言いましたが、明らかに大変なことを経験されたあとにつらい思いをずっとされている方もおられます。いろんな形の心の傷や痛みがあるのだと思います。

それに対して、科学的に原因を見つけて、例えばお薬や特別な治療で治していくというのも、もちろんひとつの精神医学のあり方ではあるのです

けれども、実際のところはそれが助けになる方はおそらく一部で、やっぱり心の傷というのはどうしても簡単には解決しないものもたくさん含まれているのです。そこで私たちがどうしているかというと、その傷というものについてのご本人のお話をただただ聴いていくということしかない部分はあるんですね。

また実際、自分がこんなことで悩んでいるんだとはっきりと分かっているという方は実はほとんどおられなくて、今つらい思いをしているというのは確かだけれども、それがどんなものかはご自身も知らないままお話しされるということが大半なんです。ですから、ご本人がお話しされて、私たちはそれを聴かせていただいて、そこには何かがあるのだろうということと一緒に探っていく。その経過の中で自然に良くなられる方もたくさんおられます。そういうことを日々させていただいていますね。

仲道：お気持ちを聴いてくださる方の存在ということが、とても重要だということですね。

野間：私はそうだと思います。最近はAIも進んでいますのでいろんな職種がAIで取って変わるんじゃないかといわれていますけれど、やはり人の話を聴くという非常に根本的なところは、やっぱり人でないだめじゃないのかなと思います。

仲道：音楽でも同じように思います。音楽は、ピアノの音は、言葉とは違うけれども、心の内を聴く、感じることができるようになります。実際、シューベルトの作品と向き合っていると、シューベルトの心の内、これはいったいどういう痛みがあるのか、どういう気持ちなのか、何を望んでいたのか、その奥深くを聴いているような感覚があります。興味深いのは、そうやってシューベルトの作品を聴こうと、シューベルトの中を探そうとしていると、同時に自分の心の中も何か探していくこととつながって、共鳴するんですね。共鳴してシューベルトと同じになるわけではなくて、全然別人の、違う時代の違う国に生きている私と、でもシューベルトの音楽の中に聴こえてくるものがリンクしていくというような感覚を持つことがあります。それによって、自分の中の痛みにも気がついたり、その痛みが何か昇華されるような思いを持つことができたりすることもあるのです。

## 繰り返すという現象

仲道：シューベルトの音楽はとても繰り返すが多いのですが、いろんなメロディが、違った色合いでもって聴こえてくるとか、その時間がただ現在進行形で進んでいるのではなくて、心の中の過去であるとか、まだ見たことのない未来であるかのような時間を感じることができて。それで、では

自分をどう認識するのかということについて考えさせてくれるような、そんな感覚を持ちます。野間先生は、いろんなお気持ちをお聴きになっていらっしゃる時に、どんなプロセスがおりなんですか。

野間：今シューベルトの作品に繰り返しが多いというお話を聴きましたが、繰り返しということ自体が、すごく深い現象だなとあらためて考えました。私自身が普段の診療の中で悩みや傷つきを抱えてこられる方のお話しをお聴きしていると、順序立ててお話をされたり、あるいは診療ごとに毎回どんどん変化するという方はやはりごく少数で、多くの方は、訴えを繰り返されるんですね。ご自身のつらい、特定の体験のエピソードであったり、あるいはご自身が常に気になっているテーマであったり、そういうものを繰り返しお話しされるということが多くです。それに対して耳を傾けるのが私たちの仕事だと思っているんですけれども、それを一生懸命に、しっかり、この繰り返しがなんなのかなと思って聴いていると、やっぱりそれだけ同じ話を繰り返さざるを得ないような、ご本人の本当の底のほうのつらさであったり、ひとつの抜け出られない苦しさみたいなものが感じ取られて、そういうところをしっかりと受け止めようと思いがらお話しを聴き続けることになります。そうしている中で、一部の方は、ふと何か楽になるというか、そこから抜け出方がおられますね。それが何かというのは非常に難しく、答えを見つけたから抜け出るとことはちょっと違う感じがあるんですね。その繰り返しの中で何かに触れるものがあるのかなと、私自身は思っていますけれども。

仲道：それは、先生と、お話しされる方が、真剣に心の中を向き合うということですね。

野間：先ほど仲道さんはシューベルトの音楽に対して、共鳴という言葉を使われていましたね。私も、共感とか、同じことを感じるということとはちょっと違うんですね。何かお互いに触れるものがあって。だから私は共振という言葉を使ったりもしますね。

仲道：共振。

野間：一緒に揺れるというかね。お互いに響くみたいな感じですね。何かそういったことを感じつつ、底のほうの抱いておられるものに、同時に触れる。そういうことはやはり大事な場面では起こっていて、何かプラスになることがあるのかなと思います。

仲道：生きていましたらね、誰しも痛みがある。本当にどの作曲家にもそれぞれの痛みというものがある。どんな楽しそうな曲でも、その根底に





は痛みというものがあるから、楽しさや幸せを感じる。でもその痛みというものは、何に起因するのか。先生は先ほど、生い立ちなどの背景には求めないとおっしゃいましたが、ある共通のロス、何かを失っているとか、それが失われているから何かを求めるといような、そんな感覚もあると思います。シューベルトに関しては、もはやこの世の中には自分の求めるものがないんじゃないかとすら思っているのではないかと思うんですけれども、そういった、ロスというようになことについてはいかがでしょうか。

**野間：**そうですね。つらさを感じるということは、つらくない状態があるはずだと、本来そうであったんじゃないかとか、あったはずなのにという気持ちを持ち、誰しも持つのかなと思うんですね。確かにロスという感覚は、皆さんいろんな形にはなるでしょうけれど、持っておられるような気はします。その傷つきがあるからこそ、何かを求めているということはあると思いますね。

## 心が根源的に求めるもの ——ハイマート

**仲道：**野間先生のご著書を拝読して、「ハイマート」というお言葉がとても印象深かったのですが、何かこう、なつかしさとかそういったことでしょうか。

**野間：**「ハイマート Heimat」というのはドイツ語でふるさと、故郷、そういったことを表しますけれども、私自身が患者さんにお会いしている中で、なつかしいものというのに強く憧れているような態度といいますか、常にそれを思って生きておられる方に何人かお会いする機会があって、このなつかしいものを求めるというのはどういうことだろうと、気になっていたんですね。例えば故郷の風景を見てみたらなつかしいと思いますし、昔々行ったことのある場所と似た風景があったらそれになつかしさがあります。あるいは、自分の親とかおじいさんおばあさんみたいな、そういう写真を見てもなつかしいと思うかもしれませんが、ご自身が非常に親しく、親密に感じられるようなもの、

それはどんなものにもあるわけではなくて、ごく一部の、極めて個別的なものにそういうものがある、と考えたときに、その対象の中に含まれているなつかしきみたいな要素に名前をつけようと思いい、「ハイマート」と仮に言ってみました。

**仲道：**その人にとってはほかのものには代えがたい、とても大切なものということですよ。それは人によって、ふるさとであったり、家族であったり、何かまた異なるものであったりするかもしれないけれども、それを人は求めて生きているといような。

**野間：**そうですね。私はこの言葉を言ったのは、ひとつはそういうものに触れているとき、なつかしいと感じているときは、一瞬いろんな痛みがちょっと癒えることもあるんですね。自分がなんなんだろうとか、自分がこの世にいていいのかとか、そういうつらさが、一瞬なくなる。それはやはり、ふるさとのように、自分を無条件で迎え入れてくれるところとか、自分の存在をそのまま受け止めてくれるもの、そのような感覚を持つということが大事な気がして。

**仲道：**存在を受け止めてくれて、自分はそこにいていいんだと、私はここにいると実感できるということですね。それは、そう思えたらそのままずっと、もう大丈夫だと思えるものなのではないでしょうか。

**野間：**実際にはそういう方が決して多いわけではないと考えると、そのなつかしきというものはやはり、日常にはないわけですね。日常は、日常の生活を送ってますのでね。その中で一瞬、何かに触れてなつかしいと思うので、そのハイマートの体験というのは、非常に刹那的、一瞬ののかなと思っています。ただその一瞬は濃密なので、その瞬間は長く感じたりするとは思うんですけれど。

**仲道：**その一瞬が、永続的なものであるような、それこそ過去から今がつながっているような、何か時間を超えるような瞬間とも考えられそうですね。

**野間：**本当にそうですね。なつかしさに浸っているときは、ほんの数分の体験であっても、すごく長い時間それに触れていたかのような錯覚を持つことがありますね。ハイマートに触れたとき、その刹那に永遠を感じるというのは、自分が生きるということの根源にある大事な何ものかに触れているからではないかと思えますね。

**仲道：**日常生活でいつも感じられるわけではなくて、ハイマートを感じる瞬間というもの、何か超越的なものにつながる可能性もありますでしょうか。

**野間：**親密なものですから自分の中にある感覚だ

とは思うんですけれども、ちょっと超越とか、彼岸のような感じもしますね。

**仲道：**彼岸。

**野間：**一瞬出会うけれどもまた、もうはかなく消えるというか。その瞬間で終わってしまうといようなもので。

**仲道：**自分がここにいていいと、自分を自分と捉えることができる、その幸せな、刹那といえるような瞬間の中に、永遠とか超越的なものを見ると。しかしそれは日常生活ではなくて、彼岸と通じている。彼岸というのは要するに死の世界ですよ。

**野間：**そうですね。もしかしたらそういうものともつながる。例えば、童謡ですね、本当にみんな聴いたらちょっとなつかしいですよ。おそらくその文化圏では、ある程度普遍的な、みんなの心に触れるような音楽が残ってきて、そういうものっていうのは、何か怖いテーマが隠れていたりしますよね。人がどこかに行ってしまったとか。

**仲道：**確かに。

**野間：**昔からあるような童話なんかもそうですね。けれども、なつかしいものにはちょっと怖さもある。どこかで死にも通じるようなものなのかなと思ったりはしていますね。

**仲道：**まさにシューベルトの、彼にとって特別な調性であった変イ長調というものがそうですね。シューベルトにとっては自らの内なる幸福である変イ長調は、調性論として持っている感覚としては葬送や死、永遠性といったもので、相反する。それをひとつのものとして捉えていると。ということは、存在と非存在の境目がどこにあるか分からないようなシューベルトの世界観ともつながっているような気がしますね。

**野間：**そうですね。そのハイマートというものに触れたときに、ああここにいていいんだという、自分というものをしっかり獲得している瞬間のはずなんだけれど、それがどこか彼岸につながっているんですね。そういう自己というものが、あると思った瞬間に非自己とつながっているみたいな。そういう体験にはなりますね。

**仲道：**自分は存在するのとかか問うていても答えは出ませんけれども、私にとっては、そのハイマートを強く感じるような体験というのは、音楽の中に心が響いて、心が震えて、ああ生きているとか、私はここにいる、自分の存在を認められるような、そんな感覚を持つんですね。でもその感覚は長く続きませんね。そのまま日常生活を送るわけではなくて。



**野間：**それは非常に大事な感覚なんだろうと思いますね。あまりこういうことは話題にされたいですけれども、私たちが日常生きていく中では、ハイマートにときどきは触れる。それはすごく自分にとってなつかしいとか、あるいは自分の安心感につながったり、あるいはそれでも彼岸につながるような、ちょっと怖い体験でもあったりしますけれども、そういうものにとときどき触れるといような、そういう生き方っていうのはやっぱり大事なのかなと思ったりしています。

**仲道：**悲しいですよ、それって。これが私の心を動かす、大切なものだというのを瞬間感じるように思うけれども、それは刹那的なものであるというのは。その瞬間に自分の存在を認めることができるような気もするけれども、それはやはり痛みや悲しみがあるからそれを見いだす自分がいるわけで。と考えていくと、今回のシューベルトのこの《即興曲》たち、移り変わったり、揺れ動いたり、曖昧になったりしていくこれらの曲を演奏していて、私は、シューベルトは本当に苦しかったと思うんですね。苦しくて、その彼岸の世界を憧れているようで、でも、それは裏を返したら、生きたいと、本当に生きたいと言っているようにも思えるんです。存在することへの悲しみ、存在しているのかどうかということの曖昧さにある苦しみ、悲しみ、でもそれは大変に愛おしく、大切な瞬間たちであるという。今回「心の花」というプログラムですけれども、心の中のそういった大切な、何か花のようなものがぼっと灯ることが、これらの《即興曲》の中から聴こえてくるのではないかなと思っています。

野間先生、今日はとても心に響くお話をありがとうございました。

**野間：**こちらこそ、ありがとうございました。

**野間 俊一** [のま・しゅんいち]

1965年香川県生まれ。精神科医／精神病理学者。京都大学講師、臨床教授を経て、現在のまこころクリニック院長。専門は、思春期青年期の精神病理学。主な著書は、『解離する生命』（みすず書房）、『身体の時間』（筑摩書房）、『身体の哲学』（講談社）など。



# 2025年「春のシリーズ」 高雅な踊り

曲目  
ベートーヴェン：  
ピアノ・ソナタ第24番  
「テレーゼ」Op. 78  
ピアノ・ソナタ第25番 Op. 79  
ピアノ・ソナタ第26番  
「告别」Op. 81a

リスト：  
メフィスト・ワルツ第1番  
「村の居酒屋での踊り」S. 514

ショパン：  
ワルツ「告别」Op. 69-1  
ワルツOp. 64-2  
ポロネーズ第6番  
「英雄」Op. 53

ラヴェル：  
優雅で感傷的なワルツ

ユニオンホール クラシックプログラム  
The Road to 2027  
IKUYO NAKAMICHI  
Piano Recital

仲道郁代  
ピアノ・リサイタル  
高雅な踊り

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第24番「テレーゼ」Op. 78、第25番Op. 79、第26番「告别」Op. 81a  
リスト：メフィスト・ワルツ第1番「村の居酒屋での踊り」S. 514  
ラヴェル：優雅で感傷的なワルツ  
ショパン：ワルツ「告别」Op. 69-1、Op. 64-2、ポロネーズ第6番「英雄」Op. 53

2025年6月1日(日)  
14:00開演 (13:20開場・16:00閉演予定)  
サントリーホール

10月25日(日) 東京開演  
クワイアハウス・アール・アンド・ミュージック・センター 10月12日(土)  
※先行発売で満席になった場合は、以後発表されない場合がございます。

チケット販売  
ジャパン・アーツぴあ 0570-001212 www.jparts.co.jp  
サントリーホールチケットセンター 03-55-55-0017  
チケットぴあ (ぴあ) 03-6271-2727  
イオンチケットセンター  
ローソンチケット like.com (Lコード: 33705)

全席指定(税込) S席¥7,000 A席¥6,000 B席¥5,000  
シニア料金 S席¥6,300 A席¥5,600 B席¥4,500  
※障がい者同伴料金は別途お申し込みください。

2025年5月10日(土)  
アクトシティ浜松 中ホール  
問合せ：浜松市文化振興財団  
053-451-1114

2025年5月17日(土)  
兵庫県立芸術文化センター  
KOBELCO 大ホール  
問合せ：芸術文化センターチケットオフィス  
0798-68-0255

2025年5月25日(日)  
宗次ホール  
問合せ：宗次ホールチケットセンター  
052-265-1718

2025年6月1日(日)  
サントリーホール  
問合せ：ジャパン・アーツ ぴあ  
0570-001212

# 2025年「秋のシリーズ」 ラヴェルの狂気

曲目  
ラヴェル：  
鏡  
水の戯れ  
夜のガスパール

2025年9月27日(土)  
長岡リリックホール  
コンサートホール

2025年9月28日(日)  
サントミューゼ 小ホール

2025年10月18日(土)  
宗次ホール

2025年10月19日(日)  
アクトシティ浜松 中ホール

2025年10月26日(日)  
東京文化会館 小ホール

# 仲道郁代 Official YouTube Channel



## 「シューベルトの心の花」関連動画

2024年 秋のシリーズ  
「シューベルトの心の花」(アナリーゼ&対談)



## The Road to 2027の関連動画

2020年 秋のシリーズ  
「ドビュッシーの見たもの」



2021年 春のシリーズ  
「幻想曲の系譜～心が求めてやまぬもの」



2021年 秋のシリーズ  
「幻想曲の模様～心のかげらの万華鏡」(対談)



2022年 春のシリーズ  
「知の泉」(アナリーゼ)



2022年 春のシリーズ  
「知の泉」ムソルグスキー《展覧会の絵》より《キエフの大きな門》



2022年 秋のシリーズ  
「前奏曲～永遠への兆し」(鼎談)



2023年 春のシリーズ  
「劇場の世界」(アナリーゼ)



2023年 春のシリーズ  
「劇場の世界」(対談)



2023年 秋のシリーズ  
「ブラームスの想念」(アナリーゼ&対談)



2024年 春のシリーズ  
「夢は何処へ」(対談)





**YAMAHA**  
Make Waves



**CFX**

Yamaha Concert Grand Piano

私と、響き合う。

旬のピアニスト情報が満載    
Pianist Lounge. <https://jp.yamaha.com/sp/pianist-lounge/>

ヤマハ株式会社

# 仲道郁代の名盤

@RCA RED SEAL

Sony Music Japan International



\*は公演曲収録アルバム

仲道自身が選んだ万華鏡のような小品集。

充実のニューヨーク録音でロマン派の神髄を描く。



**celeste**  
仲道郁代  
愛奏曲集\*

即興曲第2番変木長調  
D899-2 収録  
¥2,520(税込)  
CD ● BVCC 34162



**ロマンティック・メロディ\***

| 即興曲 変口長調 D.953-3 収録  
¥3,204(税込)  
CD ● BVCC 34011

仲道の「音楽の故郷」、シューマンへの帰還。



**シューマン:  
ファンタジー**

¥3,300(税込)  
ハイブリッドディスク  
● SICC 19008

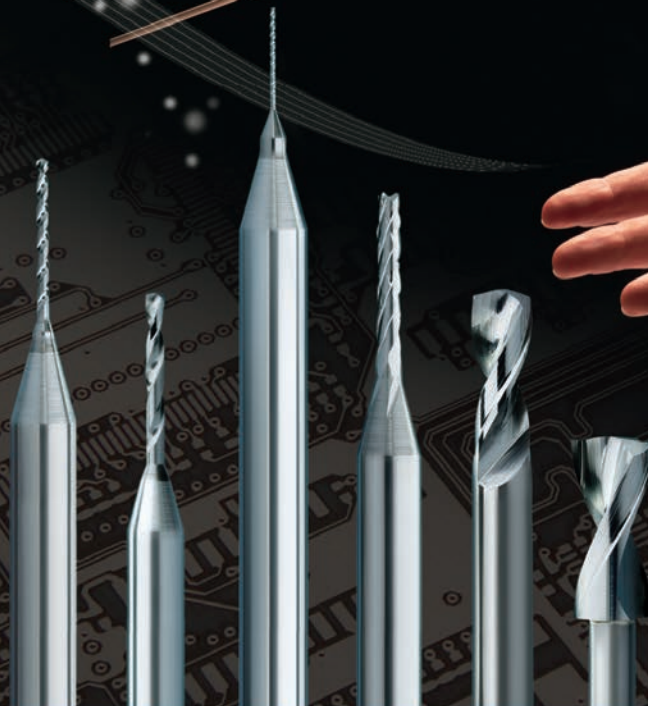


ドビュッシーの見たもの  
前奏曲集 I・映像 I/II・喜びの島\*  
¥3,300(税込)  
ハイブリッドディスク  
● BVCC 34103



仲道郁代 ベートーヴェン集成  
〜ピアノ・ソナタ&協奏曲全集\*  
¥19,800(税込)  
12CD+3ハイブリッドディスク+2DVD  
● SICC 39032~48

優れた製品は、常に最高のパフォーマンスを奏でる。



ユニオンツールはオフィシャルスポンサーとして、音楽活動を全面的に応援しています。

「優れた製品を供給し社会に貢献する」

ユニオンツールは、このフィロソフィーを昭和35年の創業から守り続けています。

人と技術と地球を結ぶ



ユニオン ツール株式会社

<http://www.uniontool.co.jp>



# 笑顔をつなぐ、 豊かな味わい。

素晴らしい音楽は、心を豊かにし、  
人生に喜びを与えてくれる。  
私たちハウス食品グループは、  
音楽が人を幸せにするように、  
食を通じて、笑顔ある暮らしを届けたい。  
人と笑顔をつなぐ、  
皆さまのグッドパートナーを目指して。



## 暮らしを彩る、レイノーの輝き。

1849年、フランスリモージュ地方で生まれたレイノー。  
創業以来、フランスを始め世界各国の王室や著名なレストランと  
共に歩んできました。エレガントな輝きとこだわりのデザインは、  
今も多くの人々から愛されています。

## ERCUIS RAYNAUD

エルキューイ・レイノー 青山店

東京都港区北青山3-6-20 KFIビル2F  
Tel.03-3797-0911 <https://ercuis-raynaud.jp>

ハウス食品グループ本社株式会社は、レイノー社製品の総輸入販売代理店です。

ホームページは  
こちらから



食でつなぐ、人と笑顔を。

 **House** ハウス食品グループ

## The Road to 2027

仲道郁代ピアノ・リサイタル「シューベルトの心の花」  
2024年10月27日(日) 開演 14:00 東京文化会館 小ホール

主催：ジャパン・アーツ

協賛： **ハウス食品グループ**  **コニオン ツール株式会社**

協力：ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル/ヤマハ株式会社

発行：有限会社オフィス・ナカミチ

デザイン：三木和彦/株式会社アンバサンドワークス

編集：北川由子/有限会社オフィス・ナカミチ